



海外研修アンケート

教師および生徒の原文を生かして掲載しておりますので、
一部表現のばらつきがありますがご了承ください。

訪問した国から学んだこと（新たに気づきを得た点）

- ◆教育はかけがえないもの
子どもたちの勉強したいという意欲、教育の質の向上を目指す現場やJICAの支援、子どもたちの夢
- ◆家族の役割
- ◆青年海外協力隊員やシニアボランティアの活躍
- ◆現場の教職員との協力、教材の工夫
- ◆コミュニケーションの大切さ、英語教育のレベルの高さ



今回の研修体験をどのように教育活動に活用するか

- ◆ネパールの子どもの一日の生活と自分たちの一日の生活の比較
- ◆家族の役割について考える。
- ◆視察した学校紹介から学ぶことの目的を考える。
- ◆青年海外協力隊員やシニアボランティアの活躍を知る。（出前講座の活用）
- ◆現在、わたしたちにもできる国際協力
- ◆校内研修で研修報告



今後の研修参加者へのアドバイス

- ◆視察校へのお土産
ヨーヨーやたこ、なわとびなどは遊び道具として使っている。
万華鏡や海の写真に興味を示していた。
- ◆インタビューしたいことをリストアップしておき、メンバーに渡しておく、ホームステイ先等から情報収集もできる。
- ◆ホームステイ
場所によっては荷物はコンパクトにまとめ、虫除け、ウエットティッシュ、ミネラルウォーター、長距離を歩くための靴等が必須。
- ◆記録は毎日整理したほうがよい。

全般的な所感

リットカラヤン中学校、サンタクリシュナ小学校、マナバ特別学校、Bagiswori中等学校、カラバリサイト視察、Buddha Tinchuleサイト視察を3日間かけて行った。さまざまな校種、立地条件の違い、環境の違いのある教育現場を視察できたことがとても実りのある研修であった。また、滞在したホテルの近くにも学校があり、朝の7時くらいから、教室の中が活気づいていた。ホームステイ先の17歳の女の子に大切なものは何かと尋ねた。彼女はドクター志望で、いい点で試験に受かるために教育（勉強）が大切だという。お父さんが大切に思っていることは何だと思うと聞くと、「子どもたちを育てて大切にすること、質のいい生活を家族に与えることだ。」と答えてくれた。日本においても、親の経済力によって学力差がつくといわれる。親の経済力による教育投資だけに着目するのは問題であり、家庭の教育力としての文化資本にも目を向けてほしいといわれる。市川伸一さん（東大大学院教授）は、「学力に影響を及ぼすのは、どれだけ子どもとコミュニケーションを取っているかとか、親のもつ価値観です。親としっかり話をする子は、筋道立てて話ができる国語力が身につく。親が新聞も本も読まず、博物館や美術館にも行かなければ、文化的な関心や教養は育たない。」と語っている。ホームステイ先では、親子や兄弟間で、しっかりコミュニケーションが取れていた。この点は、感じたことの一つである。ホームステイ先はネパールでも上流の家庭であると聞いているので、一概にどの家庭もこのような親子間のコミュニケーションがあるとはいえないであろうが。

学校等を訪問して図書室（館）があまりなく、蔵書が少ないことから、図書館教育の充実、そして、すばらしい世界遺産に誇りを持ち、その文化遺産をネパール国民の手で守り、保存していく活動が充実すればと思った。（世界遺産が生活の中に溶け込んでいるところが魅力でもありました。）

訪問した国から学んだこと（新たに気づきを得た点）

- ・様々な人との出会いがあり、支える人・支えられる人という単純な見方ができなくなり、人のもつエネルギーのすばらしさを感じた。ネパールの人々が生活している様子を実際に見るとともに、地道に活動するJICA関係者の生き方を新鮮な感覚で見ることができた。
- ・公立学校と私立学校の選択について、保護者の所得や学歴が大きく影響しているネパールの現状は日本でも少なからず見られる現象と似ている。しかし、ネパールでは下校後遊ぶ時間のある子どもと1週間前に電気がひかれた地域で、家へ帰れば草刈りや家畜の世話をしなければならない子どもたちがいる現実に愕然とした。また、教育制度が整えられた日本では考えられないネパールの学校で学ぶ子どもたちの様子をつぶさに見て、ネパールの子どもの未来に大きな課題を突きつけられるとともに、学ぶことへの意欲をもっている子どもたちのエネルギーを感じた。
- ・家庭の仕事に多くの時間を費やす公立学校の教師の一日の生活を聞き、子どもの教育に関わる時間が膨大になっている日本の教師との大きな差を感じた。この差が子どもたちの将来に大きく関わることを考えると、ネパールの子どものたちが受ける教育について改めて考えさせられた。
- ・どの学校でも花束と地域に伝わる歌や舞踊で出迎えてくれたり、発表をしてみせてくれたりした。そして、子どもたちが「お祭り」を楽しみにしていると答えた理由は、「学校が休みになり、きれいな服装で着飾るから」と素直に答え、自然と民族としての誇りが息づいているように感じた。
- ・「100匹の魚を与えるよりも1匹の魚の捕り方を教える」ことが大切と教えられたのは、子どもの学び方についての研修会であった。その後、国際協力の研修会で同じような講話を聞いた。ネパールの人々や学校視察を通して、国に力を付けることと教育の目指すこととの共通点は、「自立」であると再認識した。

今回の研修体験をどのように教育活動に活用するか

- ・ネパールの子どもの様子から日本人である自分を見つめるきっかけとする。
- ・日本とネパール、そして世界はつながっており、国々が様々な影響を受け合いながら存在していることに気付く。
- ・ネパールの人々を支える日本人がいることを伝える。
- ・自分は地球市民としてどう生きることができるか考える。
- ・日本の文化とは何なのかを考えたり見つけ直したりする機会とする。
- ・同僚への研修として日本とネパールの教育についてそのよさを認める機会とする。

今後の研修参加者へのアドバイス

- ・新しいことや知らないことへの興味はネパールも日本の子どもたちと変わらず、世界共通なのだと確信した。「海が見たい」と切に願った子どもたちの要求にその場で答えられない自分たちに無力さを感じたので、海を感じるようなグッズを用意してネパールの子どもたちに紹介できるようにしておくとうい。
- ・実際に訪問すると、情報量が非常に多く、感動的な場面も多いので、映像としての記録をどんどん残しておくかないと、帰国後の研修に困難をきたす。
- ・一人での収集より協力体制が有効であるので、各自の必要なデーターを共有しておくとうい。
- ・おみやげのけん玉等、日本のおもちゃでの遊びは、かっこよく技が決められると賞賛の拍手が起り、遊び方の紹介がスムーズになる。練習のいらぬ物として、万華鏡・自動車の絵本は人気があった。ホームステイ先の大学生には付箋紙が好まれた。
- ・研修前だけでなく、研修後も報告書等の連絡で活躍するメーリングリストの活用は重要である。
- ・民族衣装等は帰ってからの授業に効果的な教材であるので、おみやげの購入計画を綿密に立てておくとうい。
- ・研修は帰ってからの本番であることを忘れてはならない。

全般的な所感

- ・様々な学校訪問を計画していただくだけでも大変な調整であったと予想できるなかで、有名な観光地を一望できる食事場所をセッティングしていただいたことに感謝している。また、車での移動中に様々な質問に対して答えてくださった通訳や職員の方々のおかげでネパールの文化にふれる貴重な時間を過ごすことができた。
- ・ホームステイは各家庭の状況を現実として受け止め、貴重な体験の場と捉え、終了後、情報交換することで研修内容が深まる。各自が異なった体験をしたのもっと情報交換すべきだったが、日程的に十分な時間が設定できず残念である。
- ・参加者全員の協力というまでもなく、研修計画を立てその都度調整してくださった方々がいたからこそ、有意義な時間を過ごせたことに感謝している。



学びへの願望



幼い妹と一緒に



初めての万華鏡



教材開発するSV（シニアボランティア）



へき地校の通学路



様々な民族舞踊

訪問した国から学んだこと（新たに気づきを得た点）

① 言語の大切さ

現地では英語、ネパール語、他の民族の言葉に触れた。日本での生活では日本語だけで十分であるが、世界のことを理解していくためには、他言語を使えるようになることが重要だと痛感した。他の言葉を学ぶことが、その国の文化にも触れることにもなる。ほんの少しのネパール語を覚えたが、使い方、日本語との違いを知るだけでも、興味深かった。

② 人のために働くということ

現地の日本人の方たちは、それぞれがもっている技術・知識を活かして活動されているためか、日本で働いている人たちよりも活力を感じた。やりがいを感じるということが、働くうえで大きな原動力となる。また、現地で働く学校の先生方の笑顔も印象的であった。将来先生になりたい子どもたちが多いのも、先生方の影響だと思う。私自身、「何のために働くのか」ということを、改めて考える機会となった。

③ 偏った見方・考え方

様々な場で、いろんな話を聞いたが人によって内容がかわることが多かった。特にジェンダーや、水不足についてである。聞いた話を全てと捉えずに、その一面もあるというふうにつまえることが必要。私自身も教育活動を今後行うにあたって、私の見たネパールということだけで伝えることが必要だと思った。

④ 当たり前ではないということ

ネパールに到着して、まずは交通状況に驚いた。帰国後、日本の交通ルール・マナーに感動したほどである。また、アスファルトの道路の快適さ、道がいくつもあるという環境は、当たり前なことではなかったと気づかされた。恵まれた環境に慣れてしまい、何かを我慢する、工夫するという力がもしかしたら私たちは弱いのかもしいと思った。(写真：8/13 泥にタイヤをとられたトラックのため、通行不能状態に。)



⑤ 国際協力のあり方

国際協力への実践へは、いかに支援の必要性を身近に感じることができるかである。実際に設備が整っていない学校や、勉強道具が不足している状態を聞かされたら、自分がすることはできるだけしたいという気持ちになった。日本にいたままだと、現状を聞いていてもどこか人ごとで終わってしまう。今回訪問した学校とのつながりを大切にしていきたい。



⑥ 日本文化の大切さ

言語・文化が異なっても、ダンスや歌を楽しむ気持ちは共通だと実感した。私たちは阿波踊りを交流の出し物として準備したが、充実した交流に役立てることができた。ダンスを通してお互いの国の文化を体験することができた。日本の伝統的な踊りや、遊びを身に付けておくことも、国際交流に必要不可欠だと改めて実感した。海外からたくさんの文化が入ってきているが、日本ならではの文化を大切にしたいと思った。(8/12 Lalit Kalayan Lower Secondary School)

今回の研修体験をどのように教育活動に活用するか

中学生の技術・家庭、高校生の家庭基礎、家庭総合の各分野において授業実践を行っていききたい。
また、9月の文化祭で展示発表をする予定である。

【指導目標】

- ① ネパールでの生活を紹介し、自国の文化やことばに興味をもたせる。(食生活、衣生活)
- ② ネパールにおけるJICA事業の概要や協力隊の活動を紹介することで、「国際協力」という言葉について具体的なイメージを持たせる。自分の体験を伝えることで、身近に感じてもらう。一人ひとりにできることを考えさせる。
- ③ ネパール・日本の良いところを考えさせる。
- ④ 広い視野をもつ、世界の動きにアンテナをもつようにさせる。他国を知る楽しさを実感させ、それぞれの文化があることを理解させる。最終的にひとりひとりの個性、家庭をお互いが理解し合う大切さに気づかせる。

今後の研修参加者へのアドバイス

【事前の準備】

- ・それぞれのメンバーの課題の共有。
- ・時間がない場合のために、買い物リストの作成しておく。(必要なもの・数)
- ・けん玉やお手玉などの練習。(お土産を渡すときに披露すると盛り上がる)
- ・ネパール語での簡単な自己紹介をできるようにしておく。
- ・英語力もできるだけ身につけておく。
- ・名刺の作成。(現地の子どもたち、日本のボランティアの方との交流などに必須。)

【持ち物】

- ・現地の地図(訪問した学校や施設の場所をチェック)
- ・お土産はバラエティに富んだものを準備。(ステイ先の急な変更に対応できるように)
- ・ペンとメモ帳(首からストラップで下げておくとう便利)

【現地】

- ・自分の研修目的をすぐに確認できるようにしておくこと。
- ・自分が感動したこと、驚いたことなどはすぐに記録に残しておく。
- ・毎日のミーティングで、授業に必要な材料がそれぞれどのくらい集められているか確認すると良い。
- ・ネパール語は現地ですぐに覚えて覚える。
- ・希望通りになるとは限らないが、ホームステイ中にしたいことを考えておくと、ステイ先によっては協力してくれる。
- ・一度換金したルピーは日本円にしにくいので、必要な分だけ換金した方がよい。
- ・毎日のうがい。

全般的な所感

開発途上国ということもあり、今まで体験したことのない環境での研修だった。見るものすべてが新鮮で、とても充実した毎日であった。短期間ではあったが、さまざまな視察をさせて頂き、日本の良さ・悪さをストレートに感じる事ができた。便利さ・快適さは生活には必要なことだが、それによって失っていくものがある。この研修を通して、自国を知ることが、国際協力への第一歩であると再確認できた。

訪問した国から学んだこと（新たに気づきを得た点）

① 教育をあきらめない

どこに行っても次から次に顔を出す子どもたち。ネパールの潜在的エネルギーだ。貧しくて就学困難な子どもたちもいるが、それを放っておかず、なんとか学校に来させようと努力している。このことがネパールの誇りとなっている。

② 人と人との距離感の近さ

ホームステイ先の人たちがそうであったということかもしれないが、ゲストを家族の一員として受け入れ、互いの文化を尊重しようとする。

③ 英語力の高さ

ある程度の教育を受けている子どもたちはたいへん流ちょうに英語を話す。習った英語を即実生活で使うことができ、学習意欲もたいへん高い。

④ 日本人に対する好感度の高さ

将来日本に行きたいという子どもたちもたくさんいる。

⑤ 仏教と人々との距離の近さ

日本の仏は崇高で、その周囲の空気は一種特別なものがあるが、ネパールやタイで見かける仏像は俗世間化しており人間臭さがあるように感じた。日本の仏教とは流れが異なっているのだろうか。またヒンズー教と仏教もうまく共存している。

今回の研修体験をどのように教育活動に活用するか

- ① 撮ってきた写真をフォトランゲージに使用する。
- ② 国際理解教育教材の「レスカの学び」を実施する際に、今回の研修の話を入れる。
- ③ 協力隊の方へのインタビューを見せ、海外で活動している日本人を身近な人としてとらえる。
- ④ 英語の授業においてネパールの子どものたちの英語を聞かせる。

今後の研修参加者へのアドバイス

- ▼やはり食べ物、特に「水」と「油」。5日目あたりからお腹の調子が悪くなる場合が多い。「水」にあたると、下痢をし、ゲップがよく出るようになるらしい。「油」にあたると、下痢、嘔吐に苦しむことになる。正露丸はけっこうよく聞いた。ホームステイ先の人からすすめられた現地の薬をミネラルウォーターに溶かして飲むのもよく効いた。
- ▼ネパールと日本の風習では共通点もたくさんあるので(盆、仏事など)、日本の文化や行事をうまく説明できるようにしておくこと、親近感が深まると思う。ホームステイのときの話のネタにはたいへんよい。
- ▼サリーやクルタをオーダーメイドする場合は早めに。

全般的な所感

中身の濃い10日間で、思っていた以上にネパールの人たちの生活や子どもたちの様子を身近に感じることができた。学校訪問でもいろいろな校種を設定していただき有り難かった。そして、それぞれの学校に派遣されている協力隊の人たちが、皆の先頭に立って活動されているのにたいへん心を打たれた。簡単に日本の子どもたちとネパールの子どものたちを比べることはできないが、物でも成功でも時間をかけて手に入れるものという観念が、子どもに限らず、私たち日本人に欠けていることは確かなように思える。そこから、物を大切にしない、願望が叶わないとキレル。そんな子どもたちが増えるのかもしれない。「夢も物も時間をかけて手に入れるもの」そんなメッセージを生徒に伝えていけないものだろうかと思っている。

訪問した国から学んだこと（新たに気づきを得た点）

まず、どの学校で出会った子も、皆学ぶ意欲に溢れていることに驚きました。学校は多様で、公立学校の中にも大変立派な学校から山間部の小さな学校まであり、裕福な家庭の子は私立学校で英語による授業を受けている一方、村人やJICAなどの支援団体に支えられたノンフォーマルスクールに通っている子もいました。都市と農村部の格差も強く感じました。カトマンズは思っていたよりもずっと大きな都市でしたが、警備員にゲートを守られた住宅街もあれば、河原では掘って立て小屋がずらりと並んだ風景もあり、日本とは明らかに異質な格差を感じました。

援助の在り方を見ても、援助依存症に陥らないように配慮しているJICAの取り組みに感銘を受けるとともに、愛すべき素朴な国民性を持つネパールが将来どのように発展の道を模索するのか、関心を持ちました。農業国家で観光以外の基幹産業も港もなく、国土に大変な標高差がある上、交通・水道・電気などのインフラの整備が立ち後れている現状を肌で感じました。また、最大の輸出は200万人とも言われる外国への出稼ぎ労働であり知識階層の国外流出も多いという国情をブリーフィングで学び、持続的な発展を可能にする援助の在り方は、思った以上に大変な作業であることを実感しました。そういった意味で、教育の拡充と人材の育成は最優先課題であり、「2015年までに全ての子どもたちに質の高い初等教育を受ける機会を提供する」事業の実現がいかに重要かという思いが、日に日に強くなりました。

また、ヒンドゥー教徒が8割を占め、行き交う人々の様子からその信仰心がよく分かりました。特に街角には、商売・現世利益の神であるガネーシャ（いわゆる「夢をかなえるゾウ」）の像が多く、学校には二宮金次郎さんのように学問・芸術の神である Saraswati の像や絵があったことは印象的でした。その一方で、ヒンドゥー教とは切り離せないジャート（いわゆるカースト）があるのも現実で、名前でも何のジャートか分かることも教えていただきました。結婚もそのあたりを考慮に入れて父親が決定するようで、相互扶助の利点がある反面、格差社会を再生産する背景となっていると感じました。

農村では、男性は男性なりの役割があるということでしたが、農作業での地道な仕事は女性が担っている様子が印象に残りました。

今回の研修体験をどのように教育活動に活用するか

1つ目に、ネパールの人たちの生活を通して異文化理解を進めたい。右手を使つてのダルバートを中心とした1日2食の食事、紙のないトイレ、クルタやトピーに代表される民族衣装、ヒンドゥー教への信仰、多民族・多言語、交通事情、水道事情などが題材となるが、貧しさだけが強調されることがないように配慮し、人間尊重の観点を大切にしたい。

2つ目に、ネパールの教育事情や学校で学んでいる子どもたちの様子を伝えたい。困難な通学状況、貧弱な学校施設、不十分な勉強道具という厳しい環境であるにも関わらず、みんな学校や勉強が大好きで、多くの子が将来は人の役に立つために医者か学校の先生になりたいと夢見ていた。貧しい生活をしながらも、「人のために……」と言うネパールの子と、現在日本で学んでいる生徒たち自身の姿勢を比較させ、自己を見つめさせたい。

3つ目に、実際のJICAの方たちの活動の様子や、隊員の皆様方の活躍を伝え、今も多くの日本人が世界の各地で国際協力活動していること知らせたい。

最後に、国際化社会の中で経済大国である日本が世界から何を求められ、どう行動すべきかを考えさせたい。実際に自分が海外に行ったりボランティアをする機会がなくても、一人一人が国際貢献について考え、主権者として日本の在り方を決定していくことの重要性を認識させたい。

今後の研修参加者へのアドバイス

現地では仲間との協調性を大切にしながら、知っているネパール語をどんどん話し、疑問は積極的に問いかければよいと思います。現地のJICA関係者の方々ほうらやましいほどネパール語が堪能な上、ネパールについて本当に知識が豊富で、こちらの疑問に丁寧かつ熱心に答えていただけます。ホームステイ先ではサンダルがあると便利。また、実際行ってみないとどのようなご家庭か分からないので、できるだけ身軽に動けるようにした方が確実です。家族アルバムも用意しましたが、私の場合日本の豊かさを見せつけるようで少し気が引

けました(けど、あるといい)。お土産はけん玉・ダルマ落とし・竹とんぼ・折り紙を、10代の子どもたちは喜んでくれました。また、最も重要なことは体調管理です。ホテルのエアコンを浴びたおかげで不覚にも風邪気味になってしまいました。要注意です。

全般的な所感

市内の学校、山間部の学校、特別学校、非正規の学校など、多様な学校訪問の準備をしていただき、JICA関係者の皆様には本当に感謝しています。多くの問題を抱えつつも、手を合わせて「ナマステ～」と言え笑顔で心が通うネパールの人たちの素朴な心に惹かれます。彼らの生活を見、人々と触れ合うにつれ、豊かさとは何か、幸せとは何か、人間の在り方とは何か、私たち日本人は物質的には恵まれている反面、大切な何かを見失っているのではないのだろうか等、考えさせられました。

特に印象深かったのは、どの学校で出会った子も、皆学ぶ意欲に溢れていたことです。月に鉛筆1本という恵まれない環境で目を輝かせて机に向かうネパールの子がいる一方、豊かなはずの日本では勉強嫌いで目がよどんだ生徒もたくさんいます。このギャップにとまどいながらも、ネパールを視察することを通して日本の在り方や価値観を見直すきっかけになりました。



訪問した国から学んだこと（新たに気づきを得た点）

同じアジアでも、国によって発展の仕方が全然違うというのをひしひしと感じました。特に、今回はタイのバンコクの豊かさを見たあとでネパールを訪れたのでその感が強かったのかもしれませんが。

ネパールという国を見ていると本当に昔の日本、戦後復興に努力していたころの日本とそっくりだと思いました。家族を大切に、節約に努め、辛抱強く生活する。果たして、50年後、60年後にこの国がどのような成長を遂げるかどうかは時代が時代だけに先行き不透明な部分がありますが、努力が報われない世界であってはならないと強く感じました。特に若い世代が懸命に勉強し、なんとか世界で互角に戦っていけるようにと努力を重ねています。その努力が結ばれるように世界各国が支援していかねばならないと感じました。

今回の研修体験をどのように教育活動に活用するか

研修で学んだことを、いろいろな側面で授業に活用しようと考えています。たとえば食生活や日本人ボランティアの活躍、水事情や道路事情。教育を取り巻くいろいろな現実も教材になります。

幸い英語の教科書には、緒方貞子さん、途上国の女子教育の実情、NGO等を取り上げた單元があるので、それに関連付けて活用するつもりです。

今後の研修参加者へのアドバイス

まず学校の仕事を早めに片付けておくこと。帰ってきてから仕事に追われることなく、旅行のまとめと授業の準備が夏休み中にできます。授業の組み立てなどは、とても前もって立てられないかもしれませんが、子供たちに聞きたいこと、現地の人たちに聞きたいことを前もって決めておくこと良いと思います。

また、何度も言われることと思いますが、水、油が合わず体調を崩すこともあるので、体力を十分つけておいてください。ミネラルウォーターとウエットティッシュは常に持っておくこと便利。

写真は後で交換することにしておくと、人によって視点が異なるので、とても面白く、ありがたかったです。乗っている車の窓から撮る時が多いのですが、朝早起きして散歩しながら街を歩くこと案外いい写真が取れます。荷物は20キロの制限があり、持って行くものが限られるので注意。

全般的な所感

校種は異なりますが、参加された先生方は皆さん前向きで熱心な方ばかりで、いろいろ助けていただきました。何よりも、JICA四国、JOCA中国、そしてJICAネパールの担当の方々には事前研修から旅行中に手厚いサポートをしていただき、大変中身の濃い充実した研修でした。



訪問した国から学んだこと（新たに気づきを得た点）

私がネパールで学んだことは「精一杯生きる」ということである。

今回の研修では、さまざまな地域で立場の違う老若男女に出会ったが、いずれも各々の人生を懸命に生きていた。この国には生活がある。今を誠実に生きなければ明日がない。親が子どもにかける愛情も並大抵でない。親の分も子どもに教育を受けさせたい。どの親も子どもにより良い教育を受けさせようとする。しかし生活が追いつかない。生活のために働く子どもがたくさんいる現状。負のサイクルを何とかしなければならぬ。

さまざまな「格差」に加え、「カースト」の問題など、この国ではまだまだ多くの問題が山積している。

あれも、これもこうすれば良くなるのに、便利になるのにと目に付くことを挙げればきりが無い。

あくまでもこれは先進国といわれる日本に暮らしている私の目で見て捉えたネパールである。この国には可能性がある。まだまだこの国は発展していける要素を持っている。JICAを始めとするさまざまな支援団体のノウハウを受け継ぎ、自ら正のサイクルに歯車を回すのもまたこの国の人々である。

今、彼らにできることは何なのかと考えてみると、やはり「今を精一杯生きること」ではないかと思う。よりより明日を目指し、決して諦めず、この国の発展を望み、生きることではいか。転じて我々日本に眼を向けると、先進国という看板の下に胡坐をかいていやしないだろうか。懸命に生きているだろうか。私はわたしを諦めてはいけない。まだまだ「精一杯生きる」ことができるはずだ。日本で精一杯生きる私は、必ずや何らかの形で世界につながっているはずである。

世界の人々の笑顔のために、まず私たち自身が「精一杯生きる」。サンタクリシュナ小学校

そのことの大切さを私はネパールに生きる人々から学んだ。



今回の研修体験をどのように教育活動に活用するか

「あんたはほかの10万の男の子とまったく同じような男の子だ。一中略一ところがおれがあんたと仲良しになると、おれたちは互いに相手が必要になる。あんたはおれにとってこの世にたった1人の男の子になるし、おれはあんたにとってこの世にたった1匹の狐になる……」サン＝テグジュペリ『星の王子様』

私にとってネパールという国も地球に存在する多くの国のひとつにすぎなかった。しかし、この研修を通して言語や宗教、国の抱える課題などさまざまなことを学んだ今、ネパールは特別な存在になった。特に教育に関しては日本との違いが大きく、皮肉を感じもした。学びたくても学校がない。お金がない。教材がない。先生がない。日本には最先端の教育設備や教具・教材が整い、最低でも9年間学校に行く義務がある。学ぶ意欲に乏しい日本の子どもたちと対照的に目をキラキラと輝かせ「勉強が好き！」とはにかむネパールの子どもたちによりよい環境で教育を受けさせてあげたいと切に感じた。学ぶことに貪欲なネパールの子どもたち。この「学び」こそが「生き抜くこと」に直結している彼らにとっては当然の考えなのかもしれない。私たち日本人はいつの間にか「学び」に鈍感になってしまったのか。「学び」が生死を左右しない、学ばなくてもなんとか生きていける。そんな日本という国に生まれ育った子どもたちに、学べることのありがたさを伝えたい。学びたくてうずうずしている瞳を見せたい。学ぶことで世界が広がる、世界とつながる。日本の外に目を向け、世界の人々と自分がつながっていることを知るきっかけ作りをしたい。決して同情でなく、蔑むのでも奢るのでもなく、ただ自分自身のおかれている状況下でこつこつと学び続けることの大切さを伝えたい。あなたたちには学ぶチャンスがある。もっと貪欲に、もっと懸命に……。そうして身に付けた技術や知識はいずれ形を変え、今まで何とも思っていなかった国を思い遣る心や支援のための技術となるだろう。そして、その国はかけがえのない国へと変貌するに違いない。「学び」はそんなかけがえのない国を少しずつでも好転させるエネルギーになると私は考える。日本が世界ではない。世界の中の日本なのだ。「先進国日本」を誇るならば、その担うべき役割は自ずと知れてくるはず。よりよい世界を地球人みんなの手で作ることができればこんなに素晴らしいことはない。より多くの国のことを知り、かけがえのない国を少しでも増やしていくことも私たち教育現場で働く者にできることではないだろうか。

「肝心なことは目には見えない」。まずは、自分を大切にすると同じように相手を思い遣る心を育みたい。

今後の研修参加者へのアドバイス

- ①とにかく貪欲に。学校へ帰ってからの授業も気になるころだが、研修期間中は日本のことをいったんリセットしてその国に染まろう。自分の心で精一杯その土地の空気、人を感じよう。先入観抜きにして、この国のホスピタリティーを感じよう。温かい歓迎のセレモニーや透き通った瞳に熱くなる胸の鼓動を感じよう。それが授業の中でも自然と生きてくるはず。また、人間は忘れる生き物。どんなに美しい光景も心の揺らぎも時間が経てば鮮明さが損なわれる。その時の感情はその都度メモをとる習慣をつけておくと帰国後の資料整理でも役立つ。カメラに収め、目にも焼きつけ、メモもとる。これが最善かと思われる。
- ②言語についてもできるにこしたことはない。ネパール語はなかなか難しいが、状況に応じた例文を予め日本で書き出しておくといざという時焦らない。ネパールでは英語も通じるので英会話もできた方がより意思の疎通を図るのに良いだろう。私は英語に自信がなかったので電子辞書を持って行った。ホームステイ先ではネパール語と英語と日本語を3：6：1の割合で使った。
- ③あとは体調管理だ。私は強靱な胃腸の持ち主であることを自負してきたが、お守り代わりに持って行った胃腸薬すら効かない現状にその自信は打ち砕かれた。事前にどうこうと予防するのは難しい。事後対策の方をしっかりとしておくほうが賢明に思われた。

全般的な所感

「ナマステ」。最初は小さな声でカンペを見ながらでしか言えなかった。

初めての国、ホームステイ、帰国後の子ども達への授業実践…。不安で仕方なかった。しかしネパールのために働く日本人やキラキラした瞳で精一杯生きている子ども達、スタッフの方々など、多くの人とさまざまな場所で接していくうちに、私はどんどんパワーをもらっていった気がする。

非常に短い滞在でネパールという国の側面をほんの一瞬垣間見たにすぎないのかもしれない。それでも、その衝撃は決して小さいものではなかった。この思いを日本の子ども達に伝えなければ。伝えたい、共有したいという気持ちがわいてきた。

研修の終わり、少し大きくなった「ナマステ」の声。これからが本当のスタートだ。



「ナマステ！」

訪問した国から学んだこと（新たに気づきを得た点）

- ・子どもがたくさんいて、学びたいという意欲を持っている。
- ・JICAの方々が将来を見据えて支援を行っている。
- ・農業国である。狭い場所を利用して野菜の栽培を行い、至る所で野菜の販売が行われている。
- ・設備面や環境面でまだまだ多くの課題を抱えている。
- ・宗教が人々の中に入り込んでいて、信仰心が厚い。
- ・貧富の差が激しい。
- ・町に人が溢れている。「あの人たちは何をしているのだろうか。」と思った。
- ・車、自転車、バイクが道路一面に溢れる。
- ・教育面で地域社会への依存度が高く、地域住民の熱意や資金の調達能力によって差が出る。
- ・授業が始まり生徒が教室でいるのに、先生が来ていない。
- ・それぞれの文化を大切にしながら、多くの民族が共生している。
- ・ネパール語以外に民族の言語も話す。
- ・英語が生徒に一番人気のある言葉で、2番目が日本語。
- ・日本とネパールの国歌は共にベスト10に入っている。
- ・静と動。
- ・すばらしい世界遺産の存在。
- ・時間の流れがゆったりしている。
- ・自然の美しさ。



今回の研修体験をどのように教育活動に活用するか

たくさんの学校を回らせていただき、多くのことを学ぶことができました。また、ホームステイでは、ネパールの方々の日常生活に触れることができました。

まず始めに、授業で、生徒に私の見てきたネパールの姿を伝えたいと思います。違いは色々見られましたが、同じアジアということで、意識の面、考え方、文化面などにおいて共通点が多くあるということにも気づきました。短期間でしたので、断片的にはなりますが、見てきたことを全て伝え、生徒にネパールについて知ってもらいたいと思います。

次に教育について、話そうと思います。まずは山の分校に焦点を当てようと思います。1時間山道を歩いて山の分校にたどり着きました。そこで海を知らない生徒に出会いました。それも一人二人ではなく、生徒も教師も全員が海がどういうものか分からない状況であるということを知って愕然としました。生徒と共に海を知らない子どもたちに海を知らせる試みをしてみようと思います。また、本校には農業科学科があるために、農業全般について高い意識を持っています。ネパールの豊富な農産物について知ることによって、日本との比較をすると共に、日本の農業の抱える問題点について、考えてみようと思います。



最後に、国際協力とは何か、また、国際協力のあり方について、考えてみたいと思います。幸運なことに、佐野由美さんが1年間美術を指導されたLalit Kalayan Lower Secondary Schoolを訪れることができました。帰国後、再度、佐野さんのビデオを借りることができ約5年ぶりに見ましたが、新たな感動とともに、滞在していたときには見られていなかった側面も知り、自分の理解がさらに深まりました。また、シニアボランティアの岡さんよりいただいたDVDもネパールの現状を物語っています。教育支援を通して国際協力や国際支援について生徒と共に考えてみたいと思います。



今後の研修参加者へのアドバイス

全員が常に、観光旅行ではないという意識を持って行動しました。研修ということで、観光旅行とは違ってその土地や人々の中に深く入っていきたくとも勉強になると思います。できるだけ多くの事柄を吸収して帰り学校現場で役立てられるようにと、JICAの方々が計画を立ててくださっていますので、スケジュールはびっしりです。事前に体力や持久力をつけておくことは必要です。時間のあるときにはトレーニングをしておくとういと思いましたが。今回は、片道1時間山道を歩いての学校(分校)視察がありました。また、視察はすべて車で、道路状況は良くないので、車酔いする人は準備しておく必要があると思います。持って行って良かったものは、電気プラグ(世界中どこでも対応できるというのを買いました)、ウェットティッシュ、カメラの充電器、薬、日本を紹介する本(日本の祭りというのを持ってきました)、家族や職場の写真、ICレコーダー、郷土や四国のパンフレット、教科書、生徒の作品、帽子、日焼け止め。

食べ物が違うのでお腹の調子が悪くなるがよくあります。それが良かったのかどうかわかりませんが、抗生物質を処方してもらって、不安なときは食後すぐに飲んでいました。原因不明の皮膚のかぶれが起りましたが、塗り薬を持って行っていたため事なきを得ました。

スーツケースの重量制限があり、なかなか難しいのですが、教科書やパンフレット(日本語版・英語版)、日本の新聞は、持って行って役に立ったと思いました。私は教科が英語なので英語の教科書を持って行きましたが、分担して持つて行くとういと思ひます。

この度は、ホテルの前に雑貨店があり、日用品は揃っていたので、忘れても問題は無かったです。蚊や虫対策にいろいろ持つて行きましたが、ほとんどいなかったので、刺された時に塗る薬を少し持つて行くだけで十分です。運動靴は底のしっかりした滑らないもの、登山用のものが良かったように思ひました。

それぞれの学校で交流会を持ちます。そのときに1人1人が、日本のおもちゃや楽器や生徒の作品などを持って行って説明したのですが、実演できるように分担を決めて事前に練習しておくとういと思ひました。特に笛、剣玉、だるま落とし、お手玉などは、実演がかつこよく決まると、生徒も大喜びすると思ひます。

自分のネパール語での自己紹介をマスターしておくことは必要です。ある程度の長さのものを暗記しておき、状況に合わせてカットできるようにしておくとういと思ひます。挨拶の担当者は、ネパール語で考えておいて、現地でのネパール語の研修のときなどに先生に直してもらったら良いと思ひます。

全般的な所感

JICAの方々が綿密に計画を立ててくださいました。至る所に細かな配慮をしてくださり、対応もてきぱきとしていて、感謝の気持ちでいっぱいです。優秀な方たちで、誠実に仕事をこなしておられるお姿を拝見し、同じ日本人として、誇らしさを感じました。日本は先進国としての自信やプライドもあり、日本国民はアジアをリーダー的な立場で導いていくとういような意識を持っています。日本にいれば、教育制度の確立も出来ており、多少の問題はあつても、大局的には、機能しているように見えます。それと比べると、今回訪問したネパールは、教育制度の確立、先生の資質、意識の向上(学校によって差があるように思ひました)、施設面での課題など多くの問題点を抱えています。ナマステ体操の視察に一緒に行った高橋さんもネパールの生徒の能力が日本の生徒より劣るといふことは全くないと断言されていましたし、学びたいという意欲においては全体的には日本の生徒を上回っているような感じさえ受けました。

何冊かの教科書を持ち帰り、職場で回し読みをしましたが、装丁や紙の質は遙かに日本のものより劣っていますが、理科、数学、英語の教科書の内容は日本のものより濃いと皆口をそろえて申しました。短期間であつたために奥深いところまで捉えられてはいませんが、ネパールから日本は学ぶことがたくさんあると思ひました。

日本が失つたものがネパールには残っているように思ひます。外から見ると日本の問題点がよく分かつたように思ひます。